

ヘアリーベッチを用いた水稻栽培体系の確立

湖東農業普及指導センター

【普及活動のねらい・対象】

稲枝地域の土地利用型経営体である S 氏は、環境への負荷を低減した農業に以前から意欲的に取り組んでおられます。近年、米価低迷や生産資材費高騰が問題となっていることもあり、ヘアリーベッチを活用した水稻栽培に試験的に取り組まれました。ヘアリーベッチの緑肥利用は、CO₂ 削減に加え、肥料費削減が期待できる技術です。当課では令和3年秋のヘアリーベッチ播種から技術習得を支援しており、令和4年度は後作水稻の収量確保と次年度の取組拡大を目標に支援しました。

【普及活動の内容】

ヘアリーベッチの生育量調査を実施し、生育量に応じたすき込み時期や入水時期が決定できるよう助言しました。また、水稻移植後は定期的にはほ場観察や生育調査を実施し、S 氏と情報共有することで、生育初期のガスわき対策としての水管理や、水稻の生育状況に応じた追肥が適切に実施されるよう支援しました。

作付終了後は、経営評価により技術導入効果の検証を行い、経営安定につながるよう後作水稻の品種選択やヘアリーベッチの播種量の改善等、次年度に向けた提案を行いました。

【普及活動の成果】

ヘアリーベッチは目標とした生育量が確保でき、生草重で 2.4t/10a のすき込みができました。また、適期に丁寧な栽培管理が実施されたことにより、慣行ほ場と同等の収量 (510kg/10a) が確保できました。

今回は穂肥を通常量施用したことから肥料費削減は基肥分のみとなりました。ヘアリーベッチの種子代や燃料費等のかかり増しとなった経費を合わせると、大幅な所得の増加とはならなかったものの、肥料代替率の向上やヘアリーベッチ米として付加価値をつけた販路の開拓等により、経営安定につながる可能性を見いだすことができました。令和4年秋のヘアリーベッチの播種面積は 2.1ha に拡大(前年 1ha)されました。

当課では、この取組事例を参考に、カバークロップの作付拡大を推進していきます。



写真1 モアによる細断の様子



写真2 幼穂形成期頃
左:ヘアリーベッチ跡 右:慣行

◎対象者の意見

水稻の収穫終了から麦の播種開始までの期間に、ヘアリーベッチの播種ができ、現在の作業体系の中に無理なく組み入れることができた。水稻跡水稻の枠において、今後も一定面積で取組を継続したい。(生産者 S 氏)